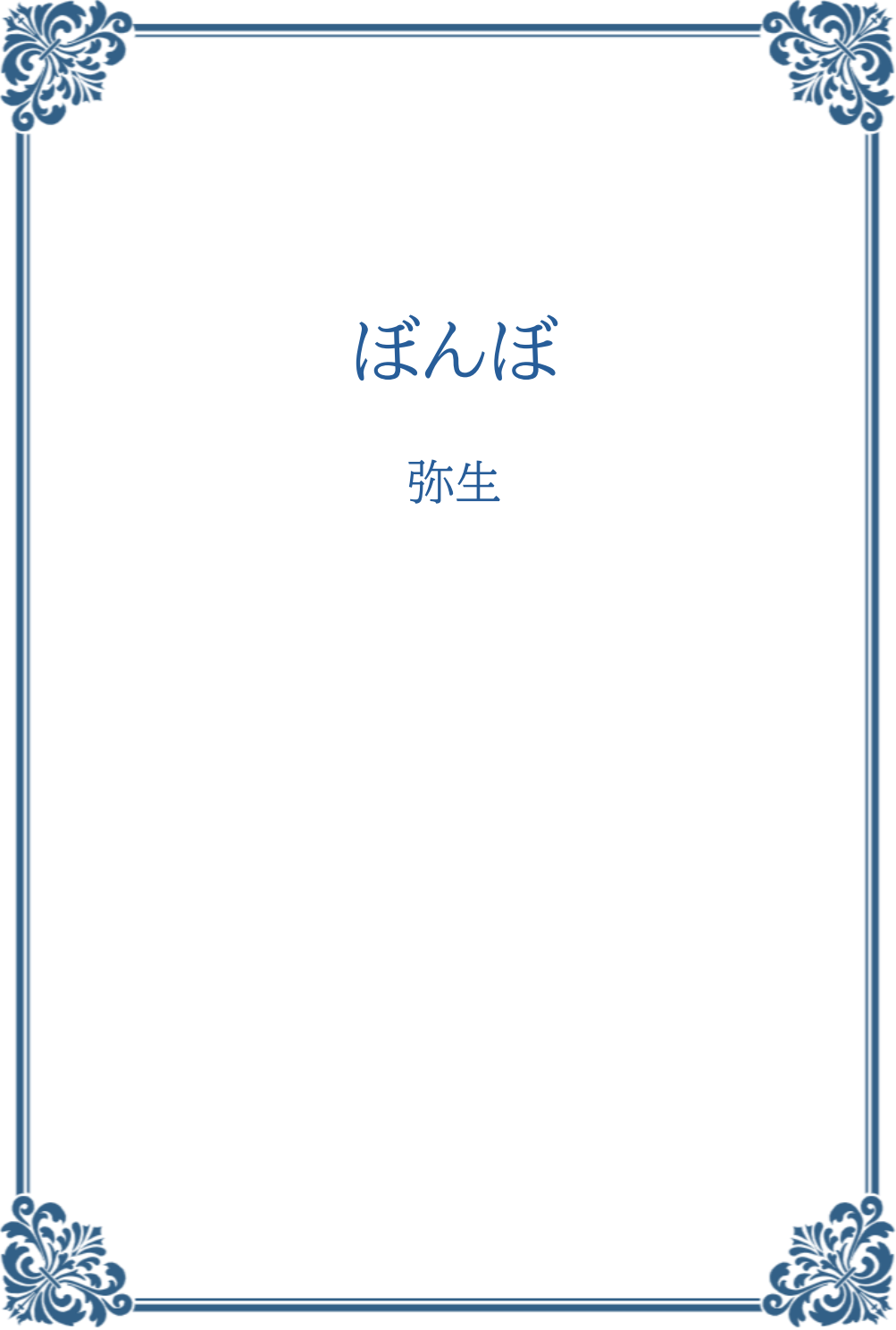




ぼんぼ

弥生

昭和二十九年。私は小学二年生。近所の專業農家の家から子守を頼まれていた。

毎日ではないが午後の数時間のことだった。赤ちゃんの名は咲子。生まれつきの障害がある子だ。そのせいかおぶっていても泣きわめくこともない。帰る時は必ず私だけに早めの夕食を食べさせてくれ、それが美味しくてちょっと楽しみだった。小学生でも少しは役に立っている気がした。

いつもの様におぶって村の道を歩いていると近くの家からおばさんが走り出て来て言った。「嫁が赤ちゃん、生まれそうだ。東風のおばさんと呼んできてくれないか。神出の畑にいつて聞いているから頼むよ」私はすぐに「いいよ」と返事をした。神出とは畑の場所の名。東風は屋号。村のどの家にもついていた。そしてこの村に嫁に来た人を皆「姉さん」と呼んだ。東風のおばさんは産婆さんではないが何人も取り上げている人だ。でも畑の場所は近くない。せめて咲子を預かってくれたら早く走ったり歩いたりできるのにと考えたが、おばさんはあわてた様子で何も言わない。私は民家の点在する村の道を急ぎやがて国道に出て下田方面に向かって歩く。しばらくすると又、細い横道に入り途中には神社がある。さらに山に向かって行くとおばさんがいる場所の近くに着いた。そこはこの道の前の畑や川の向こうだ。私はここで叫ぶことにした。「東風のおばさん、ます屋の姉さんが赤ちゃん生まれそうだってえー。早く帰ってきてえー」これ以上大きな声は出ない。すると雑木林に隠れている畑の方から「おー、分かった。すぐ帰るよお」その声は私に疲れも吹き飛ばす喜びを与えた。良かったあ、おばさんに聞こえた。帰りはゆっくり歩いた。神社の前に来ると喉の渇きに気付いた。そぼの急斜面の土手からは常に少しだが湧き水が流れている。いつもの様に茅の葉を一本元の方から取り葉先をちぎり短めにして流れの中へ差し込んだ。葉は樋となり勢い良く水が流れ落ちる。そこへ何度も口を寄せ飲んだ。冷たくてとても美味しい。神社で遊び回った時、野良仕事帰りの人、誰もが立ち寄る所だ。後になつてます屋の姉さんは双子の女の子を生んだと知った。

咲子をおぶえたのは何ヶ月かのことだった。小学生にはそれ以上は無理だったのだろう。だが四才頃ようやく歩き出すと皆と遊ぶ時も連れて歩いた。八人位の仲間とたくさんの稲むらがつくられた田んぼでかくれんぼをしていてもどこかに行ってしまうことはない。楽しそうに歩き回っている。「京子みつけ」「和夫はどこだ」と声が飛び交う。幼友達は皆呼び捨てだ。だが学校へ行くと男女共に「さん」付けとなった。先生から注意されたし余所の地区からの同級生には氣を使つたのだ。でも家に帰れば又、今まで通りになる。

咲子と二人で山の道を歩くこともあった。黙っていないで色々と話した。私の独り言みたいなものだがなんだか聞いてくれているような氣がしてくる。言葉のない咲子と楽しく過ごすのはむずかしい。

「この間さ、東の山のおばさんが今度生まれ変わる時にゃあ、こんな山ん中じゃねえ方がいいなあって言つた。そんなことできないと思うけど、もしも本当にできるなら今度はいっぱいしゃべって皆と走り回れたらいいよなあ……私は鼻で普通に息がしたい。我慢して口を閉じてると苦しくて死にそうになる。でもこれは誰にも言つたことがないさ」

咲子は私の話に合の手を入れるように「ははあ」とか「あー」と声を出した。繋いだ手を大きく振つて歌いながら歩いた日もある。「どんぐりころころ」「おててつないで」等だが私の歌声を聞き首をゆらし身体全体で喜んでいようだったし笑顔も見せた。

物心ついた頃から姉達は「又、口を開けてる。閉じな」と言つた。いつのころからかできるだけ口を閉じ、度々ほんの少しの隙間を開け呼吸をすることを覚えた。誰も鼻で息ができてるか聞かなかつたし自分も言わなかつた。

小学校も終わる頃「病院で診てもらいたいけど下田まで通わなくてはならない。バス代と治療費もかかる。耳鼻科は一度ではすまないからなあ」と母が困りきつた様子で言つたことがある。その後、病院へ向かう氣配

はなかった。そんなお金は我が家のどこを探しても見つけれなかっただろう。

この状態が日常となっていたから、まだ深く思い悩んだりはしなかった。一人で道を歩きながら、出まかせの歌を口ずさんだりして呑気なものだった。「空はあんなに青くてさ、カラスはのんびりカーと鳴き、稲の穂重そに揺れている。平和だなあって思うけど私の苦しさ誰も知らない」周りの景色を見ながら浮かんでくる言葉だった。その時だけのたった一度の歌だ。友達といえる時も、ごく普通に話していた。もう一度同じことを聞かれたりもしなかった。身体は健康そのものだったから皆と山の中へ入れば誰よりも高い場所まで木に登った。風の強い日は自然のゆりかごの気分だ。鳥のさえずりや友達同士の「ヤッホー」の掛け声の中で何も考えず楽しんでいた。だがこの様なひとときはいつまでも続かない。中学生になると帰りがおそくなるし幼友達とのつきあいも減ってゆく。それに伴い私にはどうにもできない悩みごとが待っていた。

中学生になったんだと思える英語の授業が始まり、とても興味深い時間でした。日本からほんの少しだけ外国へ向けて踏み出せそうな雰囲気が良いと思った。だが日本語さえきちんと発音が出来ないのだから英語は好きでも苦しみとなる。先生の発音をどう頑張っても真似ることは無理だった。

もうひとつ音楽の時間。時々独唱のテストがあった。小学校ではないことでした。歌った後、先生は必ず言うのです。「声は良いのに残念だ。本当に残念だ」と。私だって先生の何倍も残念な気持だ。鼻をぬけなくても良い言葉はどこまでも高く伸びた。すっきりと歌えたらどんなに良いだろう。先生の言うことはいつも心に悲しみをつれてくるのだ。じっと耐えるしかありません。

中学三年生になったある日、受け持ちの先生から「宿直室へきてね」と言われた。行くと靖さんが居た。二人に向かって「先日三行程の文を書いてもらったが二人のものを発表することになったのでそれぞれ読んで下さい。カセットに録音します」と言ったのです。すぐに嫌ですと言いたかった。でも先生に逆らうことはでき

ず読むしかありません。二人が読み終わると先生はその場で再生スイッチを押したのです。初めて録音された自分の声を聞いた時のショックはどう表せば良いのか。頭の中はまっ白。茫然。そんな気持ちのまま教室へ戻った。何で先生はこんな声を聞かせたのか。けしてどこかで発表できるはずがない。こんなだから病院で診てもらいなさいと言いたかったのではないかと思った。

教室で少し落ち着くという／＼考えが湧いてきた。声のことで面と向かってからかわれたりいじめられたりはしなかった。周りの思いやりの中で私はかなり強気で太らかに過ごせて来たのだと改めて思った。今までずっとこの話し方できたのに今さらとも思ったができるだけ小さい声なら目立たないだろう。そうしようと決めた。それから三日程たった日のこと「なんでそんなにボソボソしゃべるんだよ。もっとでかい声で話せよ」と健一さんが言った。その言葉はどこにも向けられないやりきれなさで、これ以上ふくらまない風船のようになつた心に突き刺さった。それと同時に涙はあふれ止まることを忘れたみたいに流れます。健一さんに悪いなあ、周りからいじめたと思われたら困ると考えるのだが、気持とは裏腹に涙が止まってくれない。そばに居た恵美さんが「そんなこと言うんじゃないよ」と叱るように言っていた。

だが次の日からいつもの私に戻っていた。涙を思いきり流したら最大に落ち込んでいた気持がもち直したのです。この頃、鼻で呼吸することの大切さを知った。空気中の雑菌等は鼻で濾されてきれいな空気が肺に送り込まれるということだ。何も浄化されない空気で生き続ける私の命はどうなるのか不安を感じた。

親に頼れないのだから自分の悩みは自分でどうするか考えるしかない。自分の声を聞いて尚更その思いを強くした。働いてお金を手にしたらまず一番に病院へ行つて診てもらふことだ。

卒業式も終わり皆それぞれの道を歩み始めた。私は予め試験を受け入社が決まっていた三島の会社へ向かいます。昭和三十六年四月、完成して間もない伊豆急下田駅からの出発でした。到着した三島はまばゆい程の大

都会。独身寮に入り働く人になれるのは、この上ない幸せだった。先輩に遠慮はあったものの、やさしく迎えてくれたのです。野山をかけ巡り農業の手伝いもして来た体力は仕事にも役立った。ひどく疲れて困った記憶はない。そして待ちに待った初めての給料日が来た。寮母さんから三島市内にある評判の良い病院を聞いてあったので休日に向かった。ほとんど行ったこともない病院という場所である。とても心細かったが、やっとこの日が来た喜びの気持の方が大きかった。

だが、診察の結果、先生の言葉は意外なものでした。首をかしげ「特に悪い所は無いですねえ」と言われたのだ。それはおかしいでしょ先生、こんなに鼻で呼吸ができないのにどこも悪くないんですか。もつとよく調べて下さい。できるならそうお願いしたかったが病院に来るだけで精一杯でした。

「しばらく通ってみて下さい。お薬も出します」と言われ「はい」とだけ答えている自分が情けない。結局その病院は何ヶ月か通ってみたものの効果は見られず行くこともなくなつた。勢い込んで行つたのにこのまま生きるしかないのだろうか。あの病院以上の所を捜そうという気にもなれず途方にくれていた。

夕暮れ時、寮の屋上に上ると富士山が美しく色を変えてゆく。その景色の中でいつまでも立ちつくしていた。一年に数回は帰省した。無事に勤めていることを両親は安心して居る様子だった。私はできるだけ楽しかったことを選んで話し、皆で少し笑った内容もちよつと脚色した。そうすると母は人一倍大きな声で笑う。その声を聞くのが好きだった。病院に行ったことも手短に話したが母には落胆と諦めの色が見えた。秋に帰れば父が農業の合間に掘ってきた山芋が待っている。父が大きなすり鉢でする。私は母が作った醤油味のだし汁を少しずつ入れる手伝いをした。とろろ汁は絶品でした。語り合いながら母の手料理もおいしく食べ、どんなに貧しくても帰りたい家でした。

何度目かの帰省の時のことだ。いつものように咲子に会いに行つた。布団の上で遊んでいるのでそばにくっ

ついて寝ころがりホッペをつついたり背中をトン／＼したり箱に入ったお気に入りの積木をかき回したりの手だった。その時「ぼんぼ」と聞こえた。顔を見ると又「ぼんぼ」。それは咲子の口から出ていたのだ。私は初めて聞いたので飛び上がる程驚いた。いつから言える様になったのか。嬉しくなって「ぼんぼしようか」と立て膝をして背を向けた。咲子は膝立ちをして背中にぶつかう様に来た。この頃は歩くことも困難になっていたのでおぶって何歩でも良いから歩いてあげたかった。だが、どんなに力を入れても腰が一センチも浮かない。横向きにそのまま倒れた。「無理だあ、重すぎるよ」咲子は残念な様子もなく又遊び始めた。私もそばに座って再び積み木を積んでみたり声をかけたりしていた。ふと気付くと私の斜め後に姉さんが座っていた。少し離れたところに正座して膝に両手を重ねている姿が目端に見えた。そして振り向かず目を見張った。姉さんは声も出さず両頬を次々と流れる涙で濡らしていたのだ。私には慰めや励ましの言葉が見つからなかった。声をかけたとしても姉さんの癒しになる力は無かっただろう。見ていない振りをするしかなかった。「まんま食べような」呼びかける声はいつだってどこまでもやさしい。愛おしさにあふれていた。最近、体重も一気に増えてきた咲子といつまで一緒に暮らせるのか。そんなことを考え始めていた頃だったのかも知れない。少しすると用事を思い出したのか部屋を出て行った。帰る時「又、寄ってやってくれ」と言った小柄な身体と無理して作った笑顔が辛かった。

三島へ帰る電車の中でも姉さんの顔が忘れられない。咲子といつまでも一緒にと思えば重い負担は続く。姉さんの目が届かないところでみてもらうのは考えたくないのだろう。堂々巡りの糸口は見つからない。そんなことを考えながら寮の門をくぐった。

寮生活も仕事も居心地の良い場所だった。東北や九州方面各地から集まった仲間達。故郷のこと等を語り合う友人も増えていた。ハイキング、買い物、映画と青春を満喫する暮らしだった。しかし楽しんでばかりもい

られない。二十二才になっていった私の周りは皆、年頃です。恋人ができた人。結婚退社する人。祝う気持ちと寂しさが同時に押し寄せる。そんな中、私はまだ解決できない問題を抱えていた。

ある日一才年上の昭子さんが「沼津にすぐ腕の良い耳鼻科医院があるって聞いたから行ってみたら」と病院名と場所を教えてくれた。普段から私を見て気にかけていてくれたのだと思う。数日後その病院を訪れていた。患者は多かったがようやく呼ばれた。診察前に顔面のレントゲン写真を撮った。その写真を前にして先生と向き合って座ると瞬きをすることも忘れたように何秒間か私を見つめてから「この状態で良くここまで……」驚きを隠せないように言いながら又、私を見た。「大変だったね……辛かっただろう……苦しかったね」と、とぎれとぎれの言葉が長かった苦悩の日々をこの上なくやさしく包み込む。「必ず治りますよ」力強く言われた時思わず涙があふれそうだった。私のことを分かってもらえる先生に出会えたのです。夢ではないよねと自分に問いかけたくなる程の喜びでした。

先生から告げられた病名は「鼻中隔彎曲症」。鼻の中の軟骨が曲がり、ほんの少しの隙間はあるものの空気の流れはほとんど望めないのだとのこと。隙間があったからか香りは良く感じた。この軟骨を削ってまっすぐにする手術ですと説明された。

「三十分位の手術と一週間の入院が必要ですが早い方が良い」初めて行った病院でしたがその場で手術日が決められた。そして「手術の間、親でも兄弟でも良いから付き添ってくれる人を頼んでね」と。私は困ったなと思った。短い手術の為に片道二時間半はかかる伊豆から出て来てほしいと母に言いたくなかった。農業も忙しい時です。思わず「友達ではダメですか」と聞いた。「ああ、いいですよ。何かあった時、連絡してもらえたら人なら」その言葉を聞いてホッとした。病院を教えてくれた昭子さんに頼んでみようと考えていた。

帰ってから事情を話すと快く引き受けてくれた。「その時間なら仕事も終わってるし行けるよ。鼻の手術っ

ていうと何か鼻が高くなりそう」と言った。私は反対に「骨を削るのだから低くなりそうだよ」昭子さんは「そんなことある訳ないでしょ。とにかく原因が分かかって良かった」と笑顔を見せた。私も長いトンネルの出口がようやく見えた時の光を思い出しながら頷いていた。

手術当日、「ちゃんと待ってるから安心して受けて来てね」と昭子さんは背中を優しく撫でながら言った。手術は思ったより辛いものでした。局部麻酔ですから先生の息使いが強くなるのも分かる。難しくて大変なのだろうかと思う。大工さんがノミと金槌で木を削るように「トントン、カンカン」と頭の中じゅうに響き渡ります。少し目を開けてトレーを見れば薄く削り取られた軟骨が次々と乗せられてゆきます。鼻に脱脂綿を詰め終了した。

昭子さんは「無事に終わったけど大変だったね」とベットの私を覗き込みながらいたわりの声をかけてくれた。ドアの前で振り返り少し心配そうな顔で帰って行く。感謝の気持ちをいっぱい伝えたかったが「ありがとう」と一言ようやく言えた。手術の音がまだ鳴り響いている感じでぼんやりしていたし、とても疲れていた。退院したらしっかりお礼をしなくてはと思いながら目を閉じた。

私は長くかかって治療に通うことしか頭になかった。初めて行った病院で手術をすると言われていたらとても困っただろう。その時は母から渡されたほんの少しのお金と給料しかなかった。それに入社したばかりで入院するとは言いにくい。二十二才は貯金もあった。勤めて七年目になる職場には遠慮なく言えた。術後には何もかも明るい方向に考えられたのだが入院して三日目、両耳に激痛が走った。手術の合併症だったのか中耳炎が発症した。退院はできたものの仕事が終われば走って三島駅まで行き沼津までの病院通いが始まった。手術後、間もなく口はずっと閉じていても苦しくならなかった。先生に伝えると「良かったねえ」と喜んで下さったが長引く中耳炎を心配しているようでもあった。先生、私は長年の悩みが解決したのですから充分幸せで

すと心から思っていた。通院は一年に及んだが足取りはいつも軽かった。

この頃、二十代の私に決まった人がいないことを知ると周りの人は声をかけてくれた。外見は健康そうなので良い人が居るから会ってみないかと何回か言われた。術後二年程過ぎると、結婚を考えてみようかと思うようになった。上司から紹介されて逢った人はスポーツマンでやさしそうな所に好感が持てた。しばらくのお付き合いの中で「耳が悪くて病院通いをしていた」と伝えたのだが「それ位のこと大丈夫」と言ってくれた。手術をした話は言い出せずじまいだった。

結婚する日が決まり式も終わり私も奥さんと呼ばれるようになった。

寮生活中に取り寄せあまり見ていない立派な料理本があった。それを頼りに味噌汁までも作った。たまにいつもより値の張る肉を買った日もある。本のおかげと素材の良さもあったが初心者にしてはけっこう美味しくできた。なんだか料理の腕も上がった気になり自信ありげな私である。経済的なことも考えて「この料理は月に何回もはできないよ」と言う。夫は満足そうに食べながら「はい、はい」とおどけて笑った。こんな会話の中で少しづつ主婦らしい暮らしに馴染んで行った。

長男が生まれ一年程たった頃、子供の声を録音したくてカセットデッキを買った。たまに私の声が入ると、やゝくぐもった感じがあり当たり前の声になるのは無理かも知れないと思った。気持が沈みます。それから半年位が過ぎた。テレビを見ながら長男の相手をしていると「あなたもカラオケをどうぞ」という番組が始まった。夫は仕事で留守だし歌ってみよう、誰かに聞かせる訳でもないしと録音スイッチを押した。テレビの伴奏と字幕に合わせて大きな声で歌った。長男はびっくりした顔で見ていたが又、遊びに夢中になっていた。歌い終わってから恐る恐る再生に切り替えた。流れてきた自分の歌声を信じられぬ思いで聞き続けた。とてもものびやかではつきりしています。上手下手はどうでも良かった。焦がれ続けた普通の声でした。これからはカラオ

ケも歌おう。誰とでも心置きなく話せる。子供に本をいっぱい読んであげよう。楽しみはどこまでも広がるばかりだった。

中学生の頃、泣きじゃくりながら母に訴えたい日もあった。でもそれはしなかった。言っても困らせるだけだから家では何事もない顔で過ごしてきて良かったのだ。こんなに嬉しい日に出会えたのですから。

それからゆつくりと「まみむめも、なにぬねの」と確認するように声に出して言っていた。手術前には決して正確に発音できなかった「ま行、な行」でした。

この日から五十年余りの年月が流れた。しかし自分の声を聞いた時の、どこまでも続く青空を見上げたような気持ちは現在も鮮明である。

私が咲子をおぶえなかった日から一年目位の頃、母から手紙が来た。

「施設で見てもらうことが決まったそうです。車に乗せるにも、あれだけ大きな子をおぶわなければならないのです。家での介護は限界ではないかと思っていたところでした」他の用件を書いた中に咲子のことが触れていた。

帰省の折に立ち寄ると「とても行き届いた介護の様子を見て安心したよ」そう言って姉さんは微笑んだ。片道、車で一時間はかかる施設まで毎月面会に通う日々の始まりだった。

限らない愛情を注がれながら六十三才で旅立った。

主治医から「これ程の障害を持つ人が生きた年令としては驚異的なことであり今までにもあまり例が無い」と伝えられたという。医師の言葉を語る時、両親の顔は生き抜いた我が子を心から讃える表情に満ちていた。

令和の時代となった今、函南町に住む私だが近くの丘に立つと富士の絶景に出会える。そこで鼻から思いきり息を吸い込み少しづつ口から吐く。深呼吸ができる幸せは私の人生に大きなあかりを灯した。

六年生の時、たった一度だけ苦しみを話した日、そばに居た咲子を思う。

「どこかで元気に生まれ変わったの」雄大な景色に向かって問いかける。あり得ない想像を信じてみたくなるのです。

すると女の子にしては低めの声が、ふとよぎったような、気がした。

弥生さんの昨年の作品『オレンジ色の T シャツ』は
以下の二次元コードから読むことができます。



ぼんぼ

2025 年 10 月 25 日 発行

著者 ^{やよい} 弥生

令和 7 年度 函南町立図書館 8 月～11 月 Y A 展示・企画冊子

編集・製本・発行 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

住所 419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

小学二年生の時、隣から
子守を頼まれた。赤ちゃん
の首もすわりおぶえるよう
になったからだ。だが生ま
れつきの障害がある子だっ
た。私自身も幼い頃はさほ
ど気にしなかった欠陥を抱
えていた。

